

【平成22年度倫理学専攻講演会講演要旨】

Q体への愛 もしくは世界への愛のために ——ニーチェの建築論を中心に——

森 一郎

まえおき：Q体とは？

あらかじめ届け出ておいた題目は、「世界への愛」です。訳の分からないタイトルだと思われたことでしょう。しかし本日掲げた「Q体への愛」というのは、もっと意味不明ですね。本当は「旧体」なのですが、ベストセラー小説の表記を真似てみました^①。

「旧体」とは、私の勤務する大学のキャンパスに昔からあった体育館の愛称です。隣に立っていたもう一棟の体育館——通称「新体」——と区別して、そう呼ばれていました。旧体育館は、今から八六年前の一九二四（大正一三）年竣工です^②。新体育館は一九七〇年代に建てられたのですが、新旧どちらも、今から一年前の二〇〇九年六月、取り壊されてしまいました。解体作業に先立って、その跡地の横に最新の体育施設が作られました。新旧体育館の跡地自体は、学生の憩いの場となるようにと、樹木や芝生を植え、ベンチを置くなど、広場——仮称「オープンスペース」——として整備されています。しかし、カラスがよくたむろするので、女子学生がくつろぐわけにもいかないようです。ともあれ、今年の一年生は、その空き地に何が建っていたか自体知りません。二年生以上の学生にしても、一年前まであった建物の記憶を急速に薄れさせつつあるようです。

取り壊された二棟のうち、新体育館の解体については、まだ使えるのに勿体ないという声の一部あったほかは、異論がほとんど出ませんでした。ところが、それよりはるかに古いQ体のほうは、解体再考を求める学内外の声が日増しに高くなり、解体ギリギリまで、保存運動が盛り上がりました。調べれば調べるほど、このレーモンド初期作品の近代建築史上の価値や、創立者たちの建学の精神を体現する校舎の貴重さが分かってきたのです。体育館の機能のほかに、舞踏や音楽、演劇の舞台として「社交館」という意味を併せ

持ち、八五年にわたって歴代の卒業生に愛され続けてきた、キャンパス中央に位置するシンボリック建物です。建築の専門家から重要文化財級の折り紙を付けられた大学の財産を、たんなる空き地造成のために壊すなんて、あまりに勿体ないではありませんか。

というわけで、二〇〇九年の前半、私はこの運動に深く関わりました。三月にQ体で開かれた公開シンポジウム（参加者二五〇人以上）では実行委員長を務め、四月の教授会では、解体工事中止を理事会に求める緊急動議を出しました（僅差で否決）。保存を求める有識者の会からは、二百人近くもの学者、著名人の賛同を集めた要望書が大学に提出されました。Q体の五つの小教室にはどれも暖炉が備わっており、その復活イベントが企画されたりもしました。私たち教職員や、学生有志は、最後の最後まで諦めず、解体再考を求める運動を繰り返しました。しかし大学当局はついに合理的根拠を示さな^{かど}いまま解体を強行し、それどころか、工事準備の始まった建物に入ったとの嫌で、私たちに始末書の提出を命じました。が、懲りない私たちは、一年経ってもまだ書いていません。

私たちの切なる願いも空しく、愛すべき建物は破壊されてしまいました。キャンパスの中央には、ぽっかりと「無」の空間が広がっています。その光景を眺めるたび無念でなりません。しかし一連の出来事は私にとって、ものの見方、考え方を大きく変える貴重な経験となりました。あの一連の事件は一体何であったのか、それからずっと考え続けています。いずれ「Q体への愛」と銘打った本でも出したいと思っていますのほどです。

私は、自分のいちばん大事な仕事のタイトルを「世界への愛」とすることに決めています。その前哨として「ポリスへの愛」と題する政治哲学の小編を出そうと、少しずつ準備しています。それと並行してもう一つ、今挙げた小さな「愛の書」を書こうと思い始めています。本日は、これに関連して近頃考えていることなどをお話したいと思います。今日この場に居合わせたのも何かの縁と、しばらくお付き合いいただければ幸いです。

もう一つのまえおき：建築について語る哲学者たち

それでも私は、研究分野を訊かれると、「現代における哲学の可能性です」と、臆面もなく返答することになっています。日頃、ニーチェ、ハイデガー、アーレントなどを讀んでは、考えをめぐらせておりますので、本日もそうし

た哲学者に関連してのお話になります。

「Q体への愛」という題目を掲げましたが、相手は建物ですから、その讃歌（もしくは挽歌）を試みることは、建築について語ることを意味します。歴代の哲学者の建築論を総覧できるほど勉強は進んでおりませんが、「建てること」や「住むこと」が、哲学的に興味深いテーマだということは、私のような素人にも分かります。

少し前に、『哲学者の語る建築——ハイデガー、オルテガ、ペグラー、アドルノ』^③という本が出ました（編訳者の一人は、国士舘大学工学部で建築学を講じておられる伊藤哲夫先生です）。この論文選には、ハイデガーのヘルダーリン論「詩人のように人間は住まう」の翻訳が収められ、ハイデガーは建築を論じた注目すべき哲学者の一人と目されています。なかでも重要とされるのが、一九五一年にダルムシュタットで建築家を前に行なった講演「建てること、住むこと、考えること（Bauen Wohnen Denken）」で、こちらも先頃翻訳が二種出ました^④。このテキストにちなんで、今年九月には、ハイデガー・フォーラムという討論集団が、同名の統一テーマを掲げて大会を開きます。私はその実行委員も務めています^⑤。

ハイデガーは、大地に根ざして「住むこと」を重んじた哲学者で、西南ドイツの古びた大学町フライブルクを、終生の拠点としました。哲学者の本拠地は今日、環境先進都市として知られていますが、旧市街の真ん中には、尖塔を擁したゴシック様式の教会が建ち、その周りの広場には野菜や果物、工芸品などの市が立ちます。第二次世界大戦下の爆撃で、都市は一面焼け野原となりましたが、母なる大聖堂はかろうじて残りました。他のドイツの都市と同じく、戦後には多くの建物が復元され、市民たちの不屈の意志により、中世の面影を残す美しい街並みが甦りました。またハイデガーは、フライブルク郊外のシュヴァルツヴァルト（黒い森）に山荘を一軒建て、そこで思索に耽ったことでも有名です。今訪れると掘立小屋みたいな建物ですが、スキーのできる別荘を持つという生活様式は、当時としては相当ハイカラでした。僻村トートナウベルクにある簡素な別宅を、哲学者はこよなく愛しました。学長時代、ベルリン大学からの招聘を断わったときのラジオ講話「創造的な風土——なぜわれわれは田舎にとどまるのか」では、思索と農耕とが同類の労働と見なされ、教授と農夫との交流が印象深く語られています。「どっしりと地盤に立脚していること・土着性（Bodenständigkeit）」^⑥を思考の条件とした彼が、「建てること」や「住むこと」について「考える」のは、むべなるか

などといったところです。

ただし今回はハイデガーのテキスト「建てること、住むこと、考えること」に直接向かうのではなく、道草のようですが、ニーチェが建築について触れている若干のテキストに親しむことにします。すると、思いがけなくも、ニーチェのそれらのテキストが「建てること、住むこと、考えること」をめぐるということが分かります。また、ニーチェに倣って考えを進めているアドルノの文章も一つ引き合いに出すことにします。そういう回り道をあえて選ぶのは、ハイデガーの建築論だけでは必ずしも見えてこない建築の側面に習熟することを目的としています。たとえて言えば、カントの平和論だけで平和について語ることが、一面的であらざるをえないのと同じように。

家を持つことⅠ：

ニーチェ式「建てること、住むこと、考えること」①

ハイデガーと対照的に、定住を好まず「漂泊者・旅人」を以て自任したニーチェは、家とか家庭とかいった観念に距離をとっていました。中期の傑作『愉しい学問』（従来の訳では『悦ばしき知識』）には、次のような断片が収められています（二四〇番）⁷⁾。

「海辺に。——自分の家を建てるなど、私にはよもやあるまい（家の所有者などには決してならないことは、私の幸福に必要なですらあるのだ）。だが、かりにどうしても建てなければならないとしたら、私は、幾人もの古代ローマ人のように、海に張り出した家を海辺に建てるだろう。——この美しい怪物と、幾ばくかの秘事をとにかく共有したいからだ。」

無所有・無所属という「自由」を幸福の条件とした近代の小ソクラテス派哲学者にとって、自分の家を建ててそこに住み続けたいとするマイホーム主義ほど、疎遠なものはなかったようです。そんな独身主義者&ホームレス主義者でも、ときには「家を建てるなら〜♪」と夢想したことはあったようで、海沿いに一軒家を建て、一人ひねもす海原^{うなばら}を眺め、潮騒を聴いて暮らすのも悪くない、と考えたというのです。暗い北方の内陸育ちに、南方のまばゆい海辺の光景が、いかに魅力的であったかが分かります。『愉しい学問』は全体

として、南国の陽光を浴びて解放感を味わう、北国からの放浪者の喜びを基調としています。古代ローマへの憧憬にも注意したいところです。

ところで、ニーチェがお手本にしたシノペのディオゲネス——酒樽を住まいとしたことから別名「樽のディオゲネス」、プラトンの付けたあだ名は「狂えるソクラテス」⁽⁸⁾——は、あなたの国はどこかと訊かれて、いやどこでもない、自分は「世界市民（コスモポリテース）だ」⁽⁹⁾と答えました。「コスモポリタン」とは元来、「無国籍の無宿人・浮浪者」という意味だったのです。ソクラテス自身は生涯アテナイ市民であることをやめようとしませんでした。その愛国者をポリスが死刑にして以来、哲学と国家との相性は悪くなるばかりでした。反ポリスの政治思想を抱懐したプラトンは、「友のものは皆のもの（*koina ta philōn*）」⁽¹⁰⁾だとして私的所有の観念に挑戦しますが、この同じことわざを、好敵手のディオゲネスも仲良く使って⁽¹¹⁾、財産や家族の共有にもとづく「国＝家」論を展開してみせます⁽¹²⁾。この乞食哲学者は、当時の悲劇のセリフを用いてみずからの境遇を特徴づけています——「祖国を奪われ、国もなく、家もない者。日々の糧をもの乞いて、さすらい歩く人間」⁽¹³⁾。元祖コスモポリタンのこうした生き方が、弟子ニーチェにとっても人生の指針となりました。

とはいえ、九十歳近く生きた末に「自分で息をつめて死んだ」という、「霞（アイテール）を糧としたるかの人」⁽¹⁴⁾にとってさえ、哲学するための環境確保は、重要な課題だったはずです。無所有も無所属も、無恥も無頼も、樽の中での犬のような生活も、思索のための条件としての「自由」を意味するかぎりにおいて、望ましいものなのです。どんな「場所」に身を置いているかは、思索にとって決してどうでもよいことではありません。「世のなかで最もすばらしいものは何かと訊かれたとき、「何でも言えること（言論の自由、パルレーシア）だ」と彼は答えた」⁽¹⁵⁾。このエピソードは、「言論の自由」が法外に許されていたアテナイというポリスが、故国シノペを追われたディオゲネスにとって、住み心地のよい町だったことを伝えています。良識あるアテナイ市民も、彼の奇矯で猥褻な言動に時には眉をひそめながらも、町の名物となった反骨の自由精神に尊敬と敬愛の念を抱いていたようです。「彼はまた、アテナイ人たちから愛されてもいた」⁽¹⁶⁾。

ニーチェの場合も、やはり「必要なものはただ一つ」でした。スイスの高地に滞在したりイタリアの海岸を放浪したりしたのも、いや、教授職を辞して細々とした年金生活者になったのも、家族を遠ざけて侘しい一人暮らしを

送ったのも、すべて思索に好適な環境を求めての工夫でした。断片「海辺に」で洩らされていたのも、「思索するのに絶好の住まいを建てたい」との一念だったのです。この目的手段連関は完璧です。何と首尾一貫した「建てる - 住む - 考える」の思索でしょう。

とはいえ、別の断片『楽しい学問』二九五番（17）では、「宮仕えをするとか、同じ人間といつもずっと一緒にいるとか、同じ家に住み続けるとか」いった、「長続きする習慣」は、「僭主的・暴君的」と感ずるとして断固拒否し、むしろ自分は、縛られることの少ない「つかのまの習慣」を愛する、と明言した自由人ニーチェのことです。かりに瀟洒な海の家にせっかく移り住んでも、じきに飽きてしまったに違いありません。

家を持つことⅡ：

ニーチェの徒アドルノの見た現代住宅事情

ニーチェ式「建てること、住むこと、考えること」の次なるテキストに移る前に、断片①「海辺に」中の括弧内の格率（「私の幸福」云々）を引いて、家を持つことについて鋭い考察を行なっているアドルノの文章を見ておきましょう。

ハイデガー批判でも鳴らしたアドルノは、一九三三年という年に学長になったフライブルク在住哲学者とは異なり、ユダヤ人としてナチス・ドイツを追われて、アメリカに逃れます。亡命者の居心地の悪さを糧にして綴った『ミニマ・モラリア』——『楽しい学問』を意識して著者はこの書を「哀しい学問（die traurige Wissenschaft）」と呼んでいます——の中で、アドルノはニーチェのホームレス主義を引き継ごうとします（断片十八番）。

「浮浪者収容施設。——私生活が今日どんな状態に置かれているかは、その営みの場たる住まいが示唆している通りである。そもそもひとは、住むということがもはやできなくなっているのだ。[……] 家というのは過去のものになってしまった。ヨーロッパ諸都市の爆撃も、強制労働収容所も、技術の内在的發展が住居に対してとつくの昔に下した判決を、執行者として引き継いで行なっているにすぎない。住居は、古い缶詰みたいに投げ捨てられるのが関の山なのだ。[……] 家の所有者などには決してならないことは、私の幸

福に必要ですらあるのだ」と、すでにニーチェは『楽しい学問』の中で書いている。今日ではそれに付け加えて、こう言わねばならない。「わが家にあつて居心地の良くないことが、モラルに必要である」と。[……] 今日、消費財は潜在的にきわめて豊富になってきているので、それを制限するような原則にしがみつく権利は、もはや誰にも与えられていない。その意味では、私有財産はもはや個人のものとは言えない。しかしその反面では、ある程度の財産を持っていなければ結局、所有関係の盲目的な存続に有利となる従属と困窮の状態にみずから陥るわけで、その意味では、財産を持つことも必要である。このパラドックスの正命題は、破壊に、つまり物を大切にしない非情な態度に通じ、ひいてはそれが人間自身にはね返ってくることは必定である。反対命題のほうは、それを口にするや否や、良心の疾しさを覚えつつも自分の財産に保全に汲々としている連中を益するイデオロギーになってしまう。[……]」⁽¹⁸⁾

この文章が書かれた一九四四年の段階で、「住まいなるもの、過去の遺物となり果てり」と宣告されていたことに注目しましょう。「神の死」とともに「人間の終わり」が到来しつつあると診断したのは『言葉と物』のフーコーですが、アドルノは第二次世界大戦末期すでに「家は滅んだ」と述べていたのです。もう少しアドルノの言い分にそくして言えば、「技術によって住居は死刑を宣告された」となります。現代の延命医療技術の猛威に臨死の人が曝されるずっと前に、人間は「〈死ぬ〉ことができなくなっている」と観じたのはハイデガーですが、それよりもさらに前にアドルノは、つまり戦後ドイツを襲った住宅危機以前に、「人間は〈住む〉ということができなくなってしまった」と嘆じていたのです。

しかし、だとすれば、私たちが現に住んでいるのはいったい何であるのか。要は「浮浪者収容施設（Asyl für Obdachlose）」だ、というのがアドルノの答えです。

「アジール」にもピンからキリまであるようですが、この「浮浪者収容施設」は、気位の高い乞食哲学者にとっての樽を意味するものではありません。消費物資のあふれた地球上の至るところに次々に建てられる「近代住宅」を指します。「缶詰」に譬えられており、それなりに堅牢に建てられる（はずの）コンクリート家屋は、住み続けられるのではなく、早晚使い捨てられるのです。そこに住んでいるのは、もちろん、頭陀袋^{すだ}を提げた狂える犬儒派

哲学者ではなく、労働と消費にせつせと励む堅気の生活者です。彼ら労働者は、つかのまの休日、小難しいことを考えるのを一切止めて、「大自然の懷」へ、騒々しく家族で繰り出します。彼らの宿泊する、海にせり出して忽然と建造されたリゾートホテルも、古くなるや投げ捨てられる「浮浪者収容施設」の一種です。産業＝勤勉（インダストリー）社会において「レジャー」とは、もはや、思索のための自由時間（スコレー）ではなく、直接の投資対象か、人的資源の再生産（リクリエーション）手段にすぎないのです。

現代都市に浮遊する居留民は、「コスモポリテース」の由緒正しい意味をしっかり具備しつつ、樽を仮住まいとした古代の哲学者とは違って、思索も自由な言論も忌避します。彼らの追求する自由は、共同世界からの自由＝無世界性でこそあれ、考えるための自由ではありません。缶詰をねぐらとするコスモポリタンには、「家を持つ」という観念そのものが雲散霧消していくことを、アドルノは察知しました。人類の総浮浪者化が進み、人間の住まいがおしなべてホームレス収容施設となってゆくのが近代という時代の趨勢であり、その進行過程として、都市殲滅や強制収容所といった世界大戦下の虚無化現象も位置づけられる。——アドルノのこの見立ては、巨視的に見て間違っていないからです⁽¹⁹⁾。二十一世紀のわれわれは、その延長線上に「グローバル化」を見出すこともできるでしょう。地表全体がそっくり、地球市民という名の浮浪者の収容所と化しつつあるのだとすれば。

「住まいの終焉」を反時代的考察の主題に据えたアドルノの現代住宅事情小考は、「家を持つこと」を拒否した近代犬儒派ニーチェの言い分を踏まえつつ、その先を思考しようとしています。つまり、自由精神にとって家を持たないほうが幸せだ、と言い放つだけでは済ませられない新しい状況が生じており、今日では、家を持つことも持たないことも、ともに困難になっている、というのです。最後に出てくる、財産をめぐる「パラドックス」が、これを定式化しています。テーゼは、「財産を持つべきではない」。アンチテーゼは、「財産を持つべきである」。一方で、「私有財産」は、労働と消費の総過程の拡大による社会的富の増殖には役立たず、それを阻害するだけである。それゆえ「財産を持つこと」は、労働者かつ消費者からなる産業社会のモラルに反する。他方で、絶対的貧困の惨状からして、一定の私有財産を確保しなければ人間的生活が成り立たないのは明らかである。それゆえ、「財産を持たないこと」からの脱出もまた急務である。やや昔風に表現しますと、「プチ・ブル」であることと「プロレタリア」であることのどちらも、モラルの要請である

とともに禁制だ、ということになります。さらに別の言い方をすれば、「マイホーム主義」と「ホームレス主義」の双方が仲良く矛盾を抱えているのが現代だ、となります。

「家」は財産の最たるものであり、家を建てることと家に住むことについて考えることは、「私有財産」という問題、ひいては「私的なもの」という問題に繋がります。今日、建築について語ることは、^{プライベート}私生活と現代におけるその危機について思索をめぐらせることを意味するのです。しかも、「私的なもの」について考えることは、同時に、その対概念たる「公的なもの」について考えることでもあります。建築の場合、まさにそのことが当てはまります。建物は、「公共の物（res publicae）」でもあるからです。

神の死後の公共建築：

ニーチェ式「建てること、住むこと、考えること」②

ニーチェ式「建てること、住むこと、考えること」のテキスト読解に戻りましょう。『愉しい学問』二八〇番では、思索にふさわしい建物について、別の角度からの再論が試みられます。題名からして「建てることと考えること」が話題となっていることが分かります。

「認識者の建築。——現代の大都市にとりわけ欠けているものは何か。そういう洞察が、いつか、おそらく早晩、必要となろう。じっくりものを考えるにふさわしい、静かで、広くて、ゆったりした造りの場所。天井の高い長く続く廊下をそなえていて、天気の良い日や日差しの強すぎる日にも好都合の場所。呼び売りの声や車の騒音もそこには届かず、僧侶すらエチケットに敏感になって、声高に祈 禱するのを差し控えざるをえなくなるほどの場所。つまり、引きこもって自己省察にはげむことの崇高さが全体として表現されている建物と設備。じっくりものを考えることを教会が独占していた時代は、もう終わった。かつては、観想的生（vita contemplativa）とはつねにまずもって宗教的生（vita religiosa）でなければならなかったし、教会が建てたあらゆる建物には、そういった思想が表現されている。教会建築がたとえ教会のものであるという規定を脱ぎ捨てたとしても、われわれがその建物に満足させられるかは定かでない。その建物は、やはり神の家、あの世的な交わりの宮

殿である以上、われわれ神を無^なみする者どもがそこでわれわれの思想にふけるには、あまりに悲壮で囚われた言葉を語るからである。そうした会堂や庭園を歩くときわれわれは、わが身を石や植物に変じてしまいたくなるし、自分自身の内部を散歩したくなる。」⁽²⁰⁾

思索にお誂え向きの宏壮で静謐な建物が都会には欠乏している、と十九世紀末にニーチェは診断しています。かつては教会がその役目を果たしていたが、今ではその任に堪えなくなっているからだ、と。この診断は、哲学的「観照」と宗教的「瞑想」との結びつき——デカルトの『第一哲学についての省察』にもまだそれは歴然としていました——が決定的に断ち切られたことの確認であるとともに、即物的な仕方での「神の死」の表明でもあります。ここでニーチェは、アドルノに先んじて、建てることと住むことを歴史的に考えようとしているのです。

古代ギリシアの哲学者が掲げた「観照的生 (*bios theōretikos*)」の理想は、やがてキリスト教に受容されて「観想的生 (*vita contemplativa*)」と呼ばれ、学問的生というよりはむしろ、「宗教的生」に解されるに至りました。万物の原理をひたすら眺め純粹直観的に認取する「理性」のはたらきが、黙想のうちに啓示の光を浴びて神の恩寵に接する「信仰」のありようとドッキングしたのです。教会とは、天からのメッセージが地上で受信される中継地点ですから、そういう場所にふさわしく、人びとの思いが上方を向くように高々とそびえ、かつ静かに耳をそばだてるための静穏さが確保されるべく、設計されています。じっさい、contemplation（観想・黙想）という語には temple（神殿・寺院）という言葉が埋め込まれています。ただしラテン語の *contemplari* とは、古代ローマのト^{ぼくせん}占官（鳥の飛び方・鳴き声などで占いをし公事に助言した神官）が観察用にとっておく空き地、という意味から転じて、ト占官が吉凶を占うために鳥の動作などをじっと見つめることを意味するようになった、ということのようです。観照的生の理想はキリスト教的には異教起源だったわけですし、鳥の羽音の代わりに神の御言葉を置けば良いというものでもないようですが、宗教の後ろ盾により哲学がなんとか命脈を保ってきたことは否定できません。

ところが、今や——この断片には明示的に述べられていませんが——神は死んだ。既成宗教とともに、都市の中央に威容を誇って鎮座している聖なる建物も、哲学者にとって、抹香臭いだけの胡散臭い代物になり下がった。教

会はもはや思索に不向きとなった。ゆえに、神の死んだ時代に見合う、思索に適した建築が今や必要だ、というのです。

この「哲学にふさわしい建物が必要だ」という発想自体は、断片①「海辺にて」と同じです。①と同じくこの断片②も、ニーチェが「妄想」を述べている点でも一緒です。哲学者のために大伽藍を建てよう、などという奇特な発想をするのは、それこそ、全体主義国家体制くらいでしょうから。現代日本の大学ではキャンパス再開発が進み、高層ビルがあちこちのキャンパスに姿を現わしていますが、思索者好みというよりは、消費者たる学生様のお好みにもつぱら沿うように作られているのが実情です。

「海辺に家を建てて住みたい」という願望は、ホームレス主義者にとってこそ「妄想」かもしれませんが、マイホーム主義者にとっては立派な人生計画です。それどころか現代では、各地の海岸に、リゾートホテルという名の「浮浪者収容施設」が立ち並んでいます。ニーチェの妄想がここでは、奇妙にも現実となっているのです。それに比べて、「認識者の（ための）建築」という発想のほうは、「妄想」でしかありえません。なぜか。それは、ここでの建築が「公共の物」だからです。個人の住宅なら所有者の好みモノを言いますが、公共のための建築は、特定の個人の好みに左右されてはなりません。宗教という公的需要のある観念形態に寄生していた往年の哲学には、それにふさわしい場所があてがわれていたかもしれません。そういう時代が終わった今、大都市のど真ん中に、少数の思索者のための箱モノを主張するのは、身の程知らずと言うべきです。そういうことは百も承知で、ニーチェは、シャレのつもりで「認識者の建築」という妄想に耽ったのでしょう。

ニーチェの妄想は、しかしながら、認識者たちの棲み家、つまり「学園」という限られた公共空間においては、必ずしも妄想ではありません。

樽を住まいとし宇宙規模の思索に耽った古代の哲学者を思えば、大都会の隠れ家のようなキャンパスを闊歩しつつ学問にいそしむことのできるわれわれは、恵まれすぎかもしれません。愚者の楽園とならぬよう気をつけたいものです。そしてだからこそ、大学という思索環境に関しては、妄想に耽るのではなく、足下の現実を直視し、環境保全に努めるべきではないでしょうか。そうした建物への配慮は、たんなる個人のエゴイズムでも現実逃避のノスタルジーでもなく、思索の場を求めて学園に集う人びとにとつての共通の関心事なのです。ヒマ人たちの砦には、それにふさわしい建築群があつていいのです。ついでに言うと、大学がキャンパス再開発計画を業者に丸投げして決

め、あとは問答無用で学園の共有物を破壊してしまうというのは、建築の公共性なるものの無理解をさらけ出していると言わざるをえません。

再確認しましょう。思索を大事にするつもりなら、それにふさわしい場所をまずもって確保すべきだ、としている点では、断片①「海辺に」と、断片②「認識者の建築」には、響き合うものがあります。②の特徴は、私有財産ではなく、公共建築を問題としている点です。しかも、都市における公共空間のあり方が問われていることに注意しましょう。建物というのは、私有財産の代表格である一方で、高度の公共性を有します。建てることも住むことも、私的な事柄、秘め事であるばかりでなく、公的関心事でもあるのです。このように、建築について語ることは、私的領域と公的領域との違い、ならびに両者の相互依存関係について、考えをめぐらすことを意味するのです。

都市景観の世代間継承：

ニーチェ式「建てること、住むこと、考えること」③

もう一つ、断片②には特徴的な論点が見られます。「ふさわしい場所」という本来性指定は、永遠不変ではありえず、時代によって規定され、変容を被る、という点です。教会が思索にふさわしい場所である時代は過ぎ去った。——この判断が、「神は死んだ」の公理から演繹されて出てくるのだとすれば、いささか怪しげな推論ですが⁽²¹⁾、同様の論法は、アドルノの「家は滅んだ」にも見出されます。建築を考えるに当たっては「歴史性」の次元が問題となるということを、私たちは学ぶことができます。

「建築の歴史性」は、「建築の公共性」と強い形で結びつきます。公共建築は、同時代人の共有物であるばかりでなく、過去と未来の地平に開かれているからです。現にある建築物は、既在の人びとによってかつて建てられ、長らく住まわれてきたものであり、同時に、将来の人びとに受け継いでもらえるよう、大切に守り伝えていかなければならないものなのです。寺院にしろ大学にしろ、そういう世代にまたがる公共性を有しています。大きく変わることもあります。公共空間が変貌をとげつつ存続していくためには、変わらないものがそこにどっしりと据えられていなければなりません⁽²²⁾。

「履歴」をもつのは、個々の「歴史的建造物」だけではありません。「公共の物」とは、本来、都市そのものを意味します。世田谷や荻窪、フライブル

クやフィレンツェ。大小の町、その景観の一つ一つが、歴代の市民、町民たちによって営々と築かれてきたという時代の厚みを有しています。ある町に住むということは、その町に生きた往年の人びと、やがてそこに住むであろう後代の人びとと、同じ「世界」を共有する、ということを意味します。世界が共同世界であり、かつ世代間で共有されるかぎり、世界内存在とは、間代的な相互共同存在なのです。住むとは、永代共同事業なのです。

『愉しい学問』中の、もう一つの建築論のテキストは、ジェノヴァ賛です。（二九一番）。ようやくこの文章を味読するための準備が整いました。やや長めですが、ニーチェの建築論の一達成と見られるので、全文を掲げます。

「ジェノヴァ。——この町を、その鄙びた家々や遊歩庭園を、また住宅の建ち並ぶ丘陵や斜面の広々とした一帯を、長いこと眺めたあげく、ついに私はこう言わざるをえない。過ぎ去った時代の人びとの顔つきが、私には見える——この地方には独立不羈の人間たちの肖像が一面に散らばっている、と。彼らは生きた、そして永生を得ようとした——このことを彼らは、かりそめの時間ではなく何百年もの間持ちこたえるように建てられ飾られた彼らの家でもって、私に語ってくれる。彼らは生きることが好きだった、お互いちよくちよくどんなにひどく憎み合ったとしても。建設する者の姿がいつも私には見える。まわり一面を遠くから近くまで取り囲んでいるすべての建物のうえに、また同様に町、海、そして山の稜線のうえにも、その建設者が眺めやりつつ佇んでいるのが。眺めやりつつ彼が、暴力に訴え征服を行なっているさまが。この町をそっくり自分自身の計画に組み込み、しまいには自分の所有財産にすることを、そのために町全体が自分の財産の一部と化すようにと、彼は欲する。この地方全体には、所有欲と獲得欲の豪壮にして飽くことなき我欲が一面に繁っている。こうした人びとは、遠方にあつては、どこまでも限りなく先へ進んで、新しいものを求める渴望を胸に、旧世界の向こうを張って新世界を置き据えた。それと同じく、故郷の町にあつても、懲りずに誰もがお互い反目し合ったし、自己の優越性を誇示し自分と隣人とのあいだに人格上の無限な隔たりを置く仕方を、競ってあみ出した。各人が故郷の町をもう一度独り占めしようとして、建築上の自分の考えでもって町を制圧しては、いわば自分の家の目の保養となるべく作り変えてしまった。北方では、町の建築の仕方を眺めるとき、法則が、そして合法則性と服従に対する一般的な悦びが、感銘を与える。その場合、すべての建築者の魂を支配してしまっているにちがいない、かの内面的な平等化

と順応化が、察知される。だがここジェノヴァでは、どの角を曲がっても君が見出すのは、海と冒険と東方を知っている一個の独立した人間である。法則や隣人を、退屈の一種であるかのように嫌い、すでに基礎を固められた古いものの一切を、嫉妬の眼差しでじろじろ見つめる一個の人間である。彼は、見事なまでにずる賢い想像力を働かせて、それら一切を少なくとも思想の中でもう一度基礎づけ直そうとし、その上へ自分の手を差しのべ、その中に自分の心を差し入れようとする——たとえそれが、彼の飽くことを知らぬ憂愁の魂がひとまず満足をおぼえるような、そして、自分のものしか彼の目に現われず他人のものはもはや現われなくてすむような、陽光いっぱいの午後の一瞬のことだけだとしても。」⁽²³⁾

見られるとおり、これは都市景観論です。ニーチェは、自分の愛したイタリアの町の風景を讃える珠玉の散文詩を書き残したのです。ドイツの都市の整然とした街並みがこれに対比されています。自国にやたらと厳しいニーチェにしては珍しく、ここではドイツをこき下ろしていません。むしろ、北方の都市の「合法則性」は「感銘を与える」、とそれなりに評価しています。とはいえそれは、南国の雑然とした人間臭い街並みの醸し出す魅力の引き立て役として、さらっと触れられているにすぎません。

このテキストで最も興味深いのは、ジェノヴァの町の間人臭さが、もうとっくに死んだ人間たちの「顔つき」として描かれている点です。何百年も前に死んだジェノヴァの市民たちは、その生き方を自分の住まいに深く刻み込みました。強烈な個性を放っている古い家屋一軒一軒のたたずまいに、往年のつわものどもの活躍が甦るかのようだと、ニーチェは深い感慨をもって記しています。都市景観の厚みが、つまり建てることと住むことの「履歴」が、圧倒的に迫って来ると、この旅行者は報告しています⁽²⁴⁾。

お役所頼みや業者任せの再開発によって造られる無機質空間とは違って、ジェノヴァの雑然とした街並みは、時代時代の個性あふれる市民が思い思いの工夫を凝らして建てた私邸によって成り立っています。「私的なもの」であるはずの家屋敷が並び立ち、一つの全体としての「公的なもの」を形づくっているのです。「私」と隔絶したところに鎮座し、天下り的に降ってくる「お上」とは違った「市民的公共性」が、つまり、市井の人びとの日常が競い合って豊かなハーモニーを醸し出す、共通の舞台空間としての「公共」の観念が、ここにあります。征服欲や独占欲がそこにひしめいているとしても、あ

くまでそれは複数であり、相互に張り合って高次の調和をなすのです。「無私」ならぬ「我欲」の活気に満ちた闘争的公共性^{ゴブス}の見本のような町があり、しかもそれが何百年にもわたって保持され、今なおしぶとく活着していると、ニーチェはジェノヴァを讃嘆したのです。

町というのは結局、人から成り立っています。「世界」にしろ「国家」にしろ、人びとの共存の謂いです。しかし、人は生身で現にそこに生きている、というだけではありません。人と人の関係は、物によって媒介されます。人と人を仲立ちする物たちは、人びとによって共有され、その物の共有によって始めて人間関係が存続するのです。そんなふうに、共存の歴史性は物によって守られるのですが、その物の歴史性は、これはこれで、時代を異にしながら当の物を連綿と共有する人びとによって守られます。物の世代間継承によって、共存の歴史性がはじめて可能となるのです。町並みを守ってゆくことは、どんなに即物的に見えようと、そこに住む人びとの公共性と歴史性を守ることに直結します。

建物は、そのつどの消費物資ではなく、世代にまたがって使い続けられる「公共の物」です。もし「世代間倫理」が空語でないとすれば、そのモラルには、「建築保存」が属するものでなければなりません。建物が破壊されれば、その建物によって守られてきた共存の歴史的公共性もまた、確実に消失するのですから。都市再開発やキャンパス再開発は、命というよりは物を守る世代間倫理に差し戻して再考されなければなりません。

私は一年少し前の或る日の夕方、解体間近のQ体を眺めて、その古びた体育兼社交館のたたずまいに、大学の創立者たちの強烈な面影がなお宿っているのを見出し、身震いしたおぼえがあります。建学の精神という形なきものが、校舎という形あるものに守られ置われていたことに思い至った春宵一刻でした。建築物に、死すべき者どもや神的な者どもが留まると信じられてきたことは、お墓やお社が如実に示すとおりですが、われわれの日常的な居住空間や都市景観にも、そう、「神々は居たまう」（ヘラクレイトス）のです。

南方の港町に滞在中のニーチェが家々の個性的な風貌に感じたのも、そこにしぶとく刻まれている往古の精神の気宇雄大さでした。北方出の自由精神はそれに鼓舞されたのです。それはすでに、時代を超えて存続する物たちを介しての人と人との出会いであったと言わべきでしょう。

(1) 本稿は、二〇一〇年六月二六日に国士舘大学で行なわれた倫理学専攻講演会

- の講演原稿を、若干補筆のうえ再現したものである。状況的な発言も、あえてとどめておいた。読者諸賢のご容赦を乞う。
- (2) 東京女子大学旧体育館のもつ日本近代建築史上の価値に関しては、たとえば、解体後に公刊された研究として、三沢浩『レーモンドの失われた建築』王国社、二〇一〇年、参照。
 - (3) 伊藤哲夫・水田一征編訳、中央公論美術出版、二〇〇八年。
 - (4) 中村貴志訳「建てる・住まう・考える」（『ハイデッガーの建築論——建てる・住まう・考える』中村貴志訳・編、中央公論美術出版、二〇〇八年、所収）。大宮勘一郎訳「建てる 住む 思考する」（『KAWADE道の手帖 ハイデッガー』河出書房新社、二〇〇九年、所収）。
 - (5) 二〇一〇年九月一八、一九日、早稲田大学で行なわれたハイデッガー・フォーラム第五回大会に関しては、フォーラムのホームページ (<http://www.shujitsu.ac.jp/shigaku/hf/index.htm>) を参照。
 - (6) M. Heidegger, „Schöpferische Landschaft: Warum bleiben wir in der Provinz?“, in: *Aus der Erfahrung des Denkens*, Gesamtausgabe Bd.13, Klostermann, 1983, S.11.
 - (7) F. Nietzsche, *Die fröhliche Wissenschaft*, Nr. 240 („Am Meere“), in: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe* Bd.3, dtv/Gruyter, 1980, S.513. (『悦ばしき知識』信太正三訳、ちくま学芸文庫、二七四頁。) 以下、本書からの引用はすべて拙訳。
 - (8) ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（中）』加来彰俊訳、岩波文庫、一五四頁。
 - (9) 『ギリシア哲学者列伝（中）』一六二頁。
 - (10) プラトン『国家（上）』藤沢令夫訳、岩波文庫、二七一頁（423E-424A）、三三九頁（449C）。
 - (11) 『ギリシア哲学者列伝（中）』一六九頁。
 - (12) 「友のものは皆のもの」という決まり文句を、ディオゲネス、プラトン（『国家』）、およびアリストテレス（『政治学』）が、どのように解したかについては、拙稿「プラトンと私有財産の問題」（『理想』第六八六号、特集「プラトンの「国家」論」、二〇一一年、所収）参照。
 - (13) 『ギリシア哲学者列伝（中）』一四一頁。訳注によれば、作者不明の断片だという（三九二頁）。ソフォクレスの『コロノスのオイディプス』などにも出てきておかしくないセリフではある。
 - (14) 『ギリシア哲学者列伝（中）』一七三頁。
 - (15) 『ギリシア哲学者列伝（中）』一六七頁。

- (16) 『ギリシア哲学者列伝（中）』一四五頁。
- (17) *Die fröhliche Wissenschaft*, Nr.295 („Kurze Gewohnheiten“), in: *Sämtliche Werke* Bd.3, S.535f.
- (18) Th. W. Adorno, *Minima Moralia. Reflexionen aus dem beschädigten Leben*, Nr. 18 („Asyl für Obdachlose“), in : *Gesammelte Schriften* Bd.4. Suhrkamp, 1980, S.42f.（三光長治訳、法政大学出版局、四〇頁以下、に拠りつつ抄訳を試みた。原文は、ニーチェ式に一段落だが、今回訳出した分量の数倍の長さである。）
- (19) ハイデガーが一九四九年の『ブレーメン講演』で、「ガス室や絶滅収容所における死体製造」や「水素爆弾の製造」を、機械化された農業と並べて論じたこと（『ハイデgger全集第七九巻 ブレーメン講演とフライブルク講演』森一郎訳、創文社、三七頁、参照）は、囂々たる非難を呼び起こしたが、アンチハイデggerの論客アドルノのこの「収容所」論が、それとよく似た一緒くた的発想を示しているのは興味深い。そこにひそんでいるのは、労働と消費の巨大な拡大再生産システムへ、ヒトとモノの総体をひとしなみにかり立てる画一的同質化の論理なのである。
- (20) *Die fröhliche Wissenschaft*, Nr.280 („Architektur der Erkennenden“), in: *Sämtliche Werke* Bd.3, S.524f. 強調は原文。
- (21) ニーチェ自身、『楽しい学問』（第二版）付録の詩篇の一つ「〈私の幸福！〉」では、聖マルコ寺院（ヴェネツィアにある大聖堂）で丸一日暢気に思索して過ごすことの至福を、甘美に歌い上げている。それが *vita contemplativa* の幸福でなくていったい何であろうか。
- (22) 桑子敏雄は、公共空間の歴史性を表現するために、「空間の履歴」という巧みな言葉を使っている（『空間の履歴』東信堂、二〇〇九年、参照）。
- (23) *Die fröhliche Wissenschaft*, Nr.291 („Genua“), in: *Sämtliche Werke* Bd.3, S.531f. 強調は原文。
- (24) 『ツァラトゥストラ』第三部の「小さくする美德」の出だしでは、大都市（ベルリンを想定？）の巨大建築が、その住民の精神の矮小さを象徴するものとしてコミカルに描かれている。ここにも、「都市景観はそこに住む人びとのあり方を映し出す」とする発想が認められる。